彌次行

泉鏡花

青空文庫

今は然る憂慮なし。大塚より氷川へ下りる、たら〳〵坂は、恰も芳野世經氏宅の門について曲る、昔は辻斬ありたり。こゝに幽霊坂、猫又坂、くらがり坂など謂ふあり、好事の士は尋ぬべし。田圃には赤蜻蛉、案山子、鳴子などいづれも風情なり。天麗かにして其幽霊坂の樹立の中に鳥の聲す。句になるね、と知つた振をして聲を懸くれば、何か心得たる様子にて同行の北八は腕組をして少時黙る。

氷川神社を石段の下にて拝み、此宮と植物園の竹藪との間の坂を上りて原町へ懸れり。路の彼方に名代の護謨製造所のあるあり。職人眞黒になつて働く。護謨の匂面を打つ。通り抜ければ木犀の薫高き横町なり。これより白山の裏に出でて、天外君の竹垣の前に至るまでは我々之を間道と稱へて、夜は犬の吠ゆる難處なり。件の垣根を差覗きて、をぢさん居るか、と聲を懸ける。黄菊を活けたる床の間の見透さるゝ書齋に聲あり、居る〳〵と。

やがて着流し懐手にて、冷さうな縁側に立顯れ、莞爾として曰く、何處へ。あゝ北八の野郎とそこいらまで。まあ、お入り。いづれ、と言つて分れ、大乘寺の坂を上り、駒込に出づ。

料理屋萬金の前を左へ折れて眞直に、追分を右に見て、むかうへ千駄木に至る。

路に門あり、門内兩側に小松をならべ植ゑて、奥深く住へる家なり。主人は、巣鴨邊の學校の教授にて知つた人。北八を顧みて、日曜でないから留守だけれども、氣の利いた小間使が居るぜ、一寸寄つて茶を呑まうかと笑ふ。およしよ、と苦い顔をする。即ちよして、團子坂に赴く。坂の上の煙草屋にて北八嗜む處のパイレートを購ふ。勿論身錢なり。此の舶來煙草此邊には未だ之れあり。但し濕つて味可ならず。

坂の下は、左右の植木屋、屋外に足場を設け、半纏着の若衆蛛手に搦んで、造菊の支度最中なりけり。行く〳〵フと古道具屋の前に立つ。彌次見て曰く、茶棚はあんなのが可いな。入らつしやいまし、と四十恰好の、人柄なる女房奥より出で、坐して慇懃に挨拶する。南無三聞えたかとぎよつとする。爰に於てか北八大膽に、おかみさん彼の茶棚はいくら。皆寒竹でございます、はい、お品が宜しうございます、五圓六十錢に願ひたう存じます。兩人顔を見合せて思入あり。北八心得たる顔はすれども、さすがにどぎまぎして言はむと欲する處を知らず、おかみさん歸にするよ。唯々。お邪魔でしたと兄さんは旨いものなり。虎口を免れたる顔色の、何うだ、北八恐入つたか。餘計な口を利くもんぢやないよ。

思ひ懸けず又露地の口に、抱餘る松の大木を筒切にせしよと思ふ、張子の恐しき腕一本、荷車に積置いたり。追て、大江山はこれでござい、入らはい〳〵と言ふなるべし。

笠森稻荷のあたりを通る。路傍のとある駄菓子屋の奥より、中形の浴衣に繻子の帶だらしなく、島田、襟白粉、襷がけなるが、緋褌を蹴返し、ばた〳〵と駈けて出で、一寸、煮豆屋さん〳〵。手には小皿を持ちたり。四五軒行過ぎたる威勢の善き煮豆屋、振返りて、よう！と言ふ。

そら又化性のものだと、急足に谷中に着く。いつも變らぬ景色ながら、腕と島田におびえし擧句の、心細さいはむ方なし。

森の下の徑を行けば、土濡れ、落葉濕れり。白張の提灯に、薄き日影さすも物淋し。苔蒸し、樒枯れたる墓に、門のみいかめしきもはかなしや。印の石も青きあり、白きあり、質滑にして斑のある

あり。あるが中に神婢と書いたるなにがしの女が耶蘇教徒の十字形の塚は、法の路に迷ひやせむ、異國の人の、友なきかと哀深し。

竹の埒結ひたる中に、三四人土をほり居るあたりにて、路も分らずなりしが、洋服着たる坊ちやん二人、學校の戻と見ゆるがつか〳〵と通るに頼母しくなりて、後をつけ、やがて木の間に立つ湯氣を見れば掛茶屋なりけり。

休ましておくれ、と腰をかけて一息つく。大分お暖でございますと、婆は銅の大藥罐の茶をくれる。床几の下に俵を敷けるに、犬の子一匹、其日の朝より目の見ゆるものの由、漸と食づきましたとて、老年の餘念もなげなり。折から子を背に、御新造一人、片手に蝙蝠傘をさして、片手に風車をまはして見せながら、此の前を通り行きぬ。あすこが踏切だ、徐々出懸けようと、茶店を辭す。

何うだ北八、線路の傍の彼の森が鶯花園だよ、畫に描いた天女は賣藥の廣告だ、そんなものに、見惚れるな。おつと、また其古道具屋は高さうだぜ、お辭儀をされると六ケしいぞ。いや、何か申す内に、ハヤこれは笹の雪に着いて候が、三時すぎにて店はしまひ、交番の角について曲る。この流に人集ひ葱を洗へり。葱の香の小川に流れ、とばかりにて句にはならざりしが、あゝ、もうちつとで思ふことといはぬは腹ふくるゝ業よといへば、いま一足早かりせば、笹の雪が賣切にて腹ふくれぬ事よといふ。さあ、じぶくらずに、歩行いた〳〵。

一寸伺ひます。此路を眞直に參りますと、左樣三河島と、路を行く人に教へられて、おや〳〵と、引返し、白壁の見ゆる土藏をあてに他の畦を突切るに、ちよろ〳〵水のある中に紫の花の咲いたる草あり。綺麗といひて見返勝、のんきにうしろ歩行をすれば、得ならぬ臭、細き道を、肥料室の挾撃なり。目を眠つて吶喊す。既にして三島神社の角なり。

亡なつた一葉女史が、たけくらべといふ本に、狂氣街道といつたのは是から前だざうだ、うつかりするな、恐しいよ、と固く北八を警戒す。

やあ汚え溝だ。恐しい石灰だ。酷い道だ。三階があるぜ、浴衣ばかしの土用干か、夜具の裏が眞赤な、何だ棧橋が突立つてら。叱！黙つて〳〵と、目くばせして、衣紋坂より土手に出でしが、幸ひ神田の伯父に逢はず、客待の車と、烈しい人通の眞晝間、露店の白い西瓜、埃だらけの金鍔燒、おでんの屋臺の中を抜けて柳の下をさつ〳〵と行く。實は土手の道哲に結緣して艷福を祈らばやと存ぜしが、まともに西日を受けたれば、顏がほてつて我慢ならず、土手を行くこと纔にして、日蔭の田町へ遁げて下りて、さあ、よし。北八大丈夫だ、と立直つて悠然となる。此邊小ぢんまりとしたる商賣の軒ならび、しもたやと見るは、産婆、人相見、お手紙したゝめ處なり。一軒、煮染屋の前に立ちて、買物をして居た中年増の大丸髷、紙あまた積んだる腕車を推して、小僧三人向うより來懸りしが、私語して曰く、見ねえ、年明だと。

路に太郎稻荷あり、奉納の手拭堂を蔽ふ、小き鳥居夥多し。此處彼處露地の日あたりに手習草紙を干したるが到る處に見ゆ、最もしをらし。それより待乳山の聖天に詣づ。

本堂に額き果てて、衝と立ちて階の方に歩み出でたるは、年紀はやう〳〵二十ばかりと覺しき美人、眉を拂ひ、鐵漿をつけたり。前垂がけの半纏着、跣足に駒下駄を穿かむとして、階下につい居る下足番の親仁の伸をする手に、一寸握らせ行く。親仁は高々と押

戴き、毎度何うも、といふ。境内の敷石の上を行きつ戻りつ、別にお百度を踏み居るは男女二人なり。女は年紀四十ばかり。黒縮緬の一ツ紋の羽織を着て足袋跣足、男は盲縞の腹掛、股引、彩ある七福神の模様を織りたる丈長き刺子を着たり。これは素跣足、入交ひになり、引違ひ、立交りて二人とも傍目も觸らず。おい邪魔になると悪いよと北八を促し、道を開いて、見晴に上る。名にし負ふ今戸あたり、船は水の上を音もせず、人の家の瓦屋根の間を行交ふ様まと手に取るばかり。水も青く天も青し。白帆あちこち、處々煙突の煙たなびけり、振さけ見れば雲もなきに、傍には大樹蒼空を蔽ひて物ぐらく、呪の釘もあるべき幹なり。おなじ臺に向齟巻したる子守女三人あり。身體を揺り、下駄にて板敷を踏鳴らす音おどろ〳〵し。其まゝ渡場を志す、石段の中途にて行逢ひしは、日傘さしたる、十二ばかりの友禅縮緬、踊子か。

振返れば聖天の森、待乳沈んで梢乗込む三谷堀は、此處だ、此處だ、と今戸の渡に至る。

出ますよ、さあ早く〳〵。彌次觜端にしがみついてしやがむ。北八悠然とパイレートをくゆらす。乗合十四五人、最後に腕車を乗せる。船少し右へ傾く、はツと思ふと少し蒼くなる。丁と棹をつく、ゆらりと漕出す。

船頭さん、渡場で一番川幅の廣いのは何處だい。先づ此處だね。何町位あるねといふ。唾乾きて歯の根も合はず、煙管は出したが手が震へる。北八は、にやり〳〵、中流に至る頃ひ一錢蒸汽の餘波來る、ぴツたり突伏して了ふ。危えといふは船頭の聲、ヒヤアと肝を冷す。圖らざりき、急かずに〳〵と二の句を續けるのを聞いて、目を開けば向島なり。それより百花園に遊ぶ。黄昏たり。

萩暮れて薄まばゆき夕日かな

言ひつくすべくもあらず、秋草の種々數ふべくもあらじかし。

北八が此作の如きは、園内に散ばつたる石碑短册の句と一般、難澁千萬に存ずるなり。

床几に休ひ打眺むれば、客幾組、高帽の天窓、羽織の肩、紫の袖、紅の裙、薄に見え、萩に隠れ、刈萱に搦み、葛に絡ひ、芙蓉にそよぎ、靡き亂れ、花を出づる人、花に入る人、花をめぐる人、皆此花より生れ出でて、立去りあへず、舞ひありく、人の蝶とも謂ひつべう。

などと落雁を噛つて居る。處へ！　供を二人つれて、車夫體の壯佼にでつぷりと肥えた親仁の、唇がべろ〳〵として無花果の裂けたる如き、眦の下れる、頬の肉掴むほどあるのを負はして、六十有餘の媼、身の丈拔群にして、眼鋭く鼻の上の皺に悪相を刻み歯の揃へる水々しきが、小紋縮緬のりうたる着附、金時計をさげて、片手に煙管をつまみ上げ、さすがに茶漉の出た脛に、淺葱縮緬を搦ませながら、片手に銀の鎖を握り、これに渦毛の斑の艶々しき狆を繋いで、ぐい〳〵と手綱のやうに捌いて來しが、太い聲して、何うぢや未だ歩行くか、と言ふ〳〵人も無げにさつさつと縦横に濶歩する。人に負はして連れた親仁は、腰の拔けたる夫なるべし。驚破秋草に、あやかしのついて候ぞ、と身構したるほどこそあれ、安下宿の娘と書生として、出來合らしき夫婦の來りしが、當歳ばかりの嬰兒を、男が、小手のやうに白シヤツを鎧へる手に、高々と抱いて、大童。それ鼬の道を切る時押して進めば禍あり、山に櫛の落ちたる時、之を避けざれば身を損ふ。兩頭の蛇を見たるものは死し、路に小兒を抱いた亭主を見れば、壽長からずとしてある也。ああ情ない目を

見せられる、鶴亀々々と北八と共に寒くなる。人の難儀も構はばこそ、瓢箪棚の下に陣取りて、坊やは何處だ、母ちやんには、見えないよう、あばよといへ、ほら此處だ、ほらほらはゝはゝゝおほゝゝと高笑。弓矢八幡もう堪らぬ。よい〳〵の、犬の、婆の、金時計の、淺葱の褌の、其上に、子抱の亭主と來た日には、こりや何情までも見せられたら、目が眩まうも知れぬぞと、あたふた百花園を遁げて出る。

白髯の土手へ上るが疾いか、さあ助からぬぞ。二人乘、小官員と見えた御夫婦が合乘也。ソレを猜みは仕らじ。妬きはいたさじ、何とも申さじ。然りながら、然りながら、同一く子持でこれが又、野郎が膝にぞ抱いたりける。

わツといつて駈け抜けて、後をも見ずに五六町、彌次さん、北八、と顔を見合はせ、互に無事を祝し合ひ、まあ、ともかくも橋を越さう、腹も丁度北山だ、筑波おろしも寒うなつたと、急足になつて來る。言問の曲角で、天道是か非か、又一組、之は又念入な、旦那様は洋服の高帽子で、而して若様をお抱き遊ばし、奥様は深張の蝙蝠傘澄して押並ぶ後から、はれやれお乳の人がついて手ぶらなり。えゝ！　日本といふ國は、男が子を抱いて歩行く處か、もう叶はぬこりやならぬ。殺さば殺せ、とベツたり尻餅。

旦那お相乘參りませう、と折よく來懸つた二人乘に這ふやうにして二人乘込み、淺草まで急いでくんな。安い料理屋で縁起直しに一杯飲む。此處で電燈がついて夕飯を認め、やゝ人心地になる。小庭を隔てた奥座敷で男女打交りのひそ〳〵話、本所も、あの餘り奥の方ぢやあ私厭アよ、と若い聲の媚めかしさ。旦那業平橋の邊が可うございますよ。おほゝ、と老けた聲の恐しさ。圍者の相談とおぼしけれど、懲りて詮議に及ばず。まだ此方が助りさうだと一笑しつゝ歸途に就く。噫此行、氷川の宮を拜するより、谷中を過ぎ、根岸を歩行き、土手より今戸に出で、向島に至り、淺草を經て歸る。半日の散策、神祇あり、釋教あり、戀あり、無常あり、景あり、人あり、從うて又情あり、錢の少きをいかにせむ。

明治三十二年十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「彌次行《やじかう》」となっています。
※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。
入力：門田裕志
校正：米田進
2002年4月24日作成
2016年2月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彌次行

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/